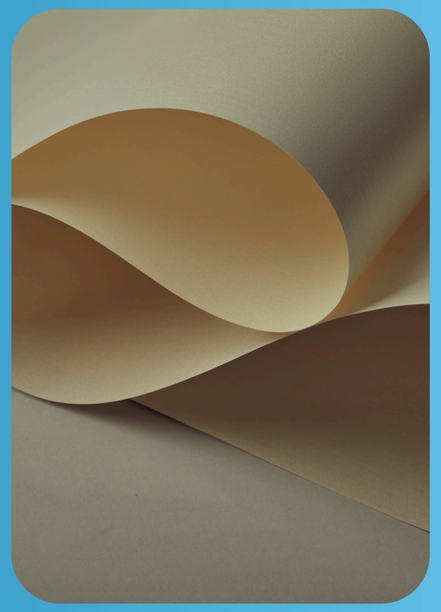

＼ 特設ページ ／

延岡ＩＴカレッジ
成果事例集 vol.1

令和７年８月刊行

――地域で活きるITスキル、ここから未来が動き出す。――

延岡ITカレッジは、市内事業者のDX推進と、地域に根ざしたデジタル人材の育成を目的に、令和4年度からスタートしました。
市内事業者や求職者、学生など幅広い世代が受講し、これまでに、延べ150名以上が修了。受講生の多くが未経験からITスキルを習得し、業務改善やキャリア転換、新たな挑戦へと踏み出しています。
本冊子では、令和6年度に受講した皆さんの声や実践事例を紹介。受講をきっかけに生まれた前向きな変化や、新たな挑戦の姿から、「地域で活きるITスキル」の可能性を感じていただける一冊です。

＼令和7年度も開講！／
あなたも、次の一歩をこの場所から。

延岡市主催：延岡ITカレッジ運営事業
Nobeoka IT college Collection of Episodes of Achievement

延岡市人材政策・移住定住推進室
TEL　：0982－20－7176
MAIL：jinzai@city.nobeoka.miyazaki.jp

Episode 1

令和6年度延岡ITカレッジ受講
事業者コース

「延岡ITカレッジ、得しかないです。」

株式会社共同設計　柴田　敏男氏（取締役・統括部長）

「品質と納期の両立を、仕組みで実現したい」—属人化からの脱却をめざして—

■ 従来の散在する情報と属人化した工程

「若手が設計を担い、最終チェックはベテラン任せ。誰がどこまで把握しているのか分からず、工程が滞っても気づかれないことがあった」——株式会社共同設計の柴田氏は、当時の課題をこう語る。属人化を解消し、品質と納期の両立を図る。そんな体制を築くため、柴田氏は延岡ITカレッジの受講を決めた。図面データの整理もまた、見過ごせない課題だった。「コンサルに任せるだけでなく、自分で何ができるのかを知りたかった」。その思いが、背中を押した。

■ 受講中「できるかも」という実感

特に印象的だったのは、ChatGPTを通じて「文章でAIに指示を出す」考え方を実践的に学べたこと。調べ方や活用法が業務に直結していると、柴田氏はいう。ノーコードではkintoneやPower Automateを体験し応用を考える視点が芽生えた。視察で現場の工夫に触れたことで「自分たちにもできる」と意識が変化し、課題に対して具体策を模索する姿勢へとシフトした。

また、不安を抱えていた他の受講生の着実な成長や、学びを通じて少しずつ互いに良い影響を与え合う空気が生まれていたことも、単なる知識習得に留まらない付加価値となっていた。

■ 受講後「DX化への構想が明確に」

受講を通じて、業務改善に向けた具体的な構想が明確になった。「今考えているのは、行程やスケジュールを一元管理できるシステム。チェックシートも整備して、誰が見ても工程を把握できるようにしたい。品質を保ちながら生産性を高める仕組みが必要だと感じた。」特に重視しているのは、属人化を防ぐチェック体制の構築。 情報を人ではなく仕組みで回すことで、業務の平準化・安定化を目指している。さらに、受講前に課題だった「図面データの整理」についても、膨大な紙の設計図をデータとして再構成する視点を得たことが大きな一歩となった。

■ 「自分でもできた」実感とその先へ

「DX化って何か？」という問いが、受講を通じて“つながった”感覚があったという柴田氏。 「自分が社内の“DX化の入り口”になる」との意識が芽生え、得た基礎知識は新たな判断軸にもなっている。外部業者からの「システムやツール導入」の提案にも対応しやすくなり、今後は“仕組みづくり”の大切さを社内外に伝えていきたいと話す。

■ 最後に—これからの挑戦

今後は、ノーコードツールなどを活用した「自社開発」「外注」「ハイブリッド」など、最適な形を探っていきたいと話す。「今までできないと思っていたことが、できるようになってきた。変わりたいという意志さえあれば、変わっていけるんだと感じています。」最後に、これから受講を考える事業者へのメッセージを尋ねると———「損したくなければ、得をしに行くべき。無料で自社のDX化への課題を掘り起こせる機会なんて、そうそうないですから」

■ 講師からのメッセージ

「受講を通じて、紙図面を“活用できるデータ”として捉える視点が育ってきたことが印象的でした。現場の課題に向き合いながら、業務全体をどうアップデートしていけるか——そうした意識の変化が、今後の実践につながっていくことを期待しています。」

Episode 2

令和6年度延岡ITカレッジ受講
事業者コース

「“チームの学び”が、会社を変える。」

寺田測地設計有限会社　寺田　龍一郎 氏（代表取締役）
藤高　美由紀 氏（社員）

「経営と現場をつなぐ5か月」— 延岡ITカレッジで学んだ“対話と実装” —

■ アナログ依存からの脱却と全社的な挑戦

寺田測地設計有限会社では、業務の多くが紙ベースで、情報伝達もアナログに頼っていた。デジタル化の波に危機感を抱いた寺田社長は、迷いを抱えるDX推進課の藤高氏とともに、「延岡ITカレッジ」への受講を決断。経営と現場が一体となった挑戦が始まった。

■ 受講中 「学び」がもたらす視点と対話

講座の中で、業種を問わず活用できるITスキルや実践事例が紹介された。特に印象に残ったのは、広島県のごみ収集会社のDX事例だった。「紙の記録をクラウド化しただけで業務が一変した。“DXには終わりがない”という言葉が響いた」と藤高氏は語る。Power AutomateやPower Appsなど、実務に直結するツールも学び、社内活用のイメージが具体化したという。寺田氏は「できないことをできるようにするのが今の社会の前提。学びの先に、さらに広い視点があると気づいた」と語る。またハッカソンでは、立場を超えた対話の難しさと熱量に触れ、藤高氏は「話し合いの大変さと向き合い自分にも火がついた」と振り返る。

■ 受講後「社内に広がる“やってみよう”の機運」

社内に変化が現れた。Power Appsで受注情報の自動通知アプリを構築し、Teamsの導入により、紙中心だった会議がオンラインに移行。情報共有のスピードと質が大きく向上した。さらに、転居により退職を検討していた社員には、リモート勤務の環境を整備。IT活用が雇用の継続を可能にした。「デジタルを使えば、場所に縛られず働ける」と寺田氏。藤高氏も「学んだことを、一人ひとりに丁寧に伝え、積み重ねていきたい」と語る。

■ ハッカソンでの出会いが、新たな仲間に

延岡ITカレッジでは、求職者と事業者が共にチームを組み、課題解決に取り組む「ハッカソン」が実施されていた。この場で、後に採用することとなるキャリアアップコース受講生・山下氏と出会うこととなった。「AIに強く、タイピングが速い。会社に新しい刺激をくれると思った」と寺田氏。山下氏は現在、AI/DX課でドローンの飛行記録管理アプリ開発などを担当しており、社内で確かな存在感を示している。

■ これから—“デジタルを使える会社”を目指して

現在、同社では16名の社員それぞれに、少しずつ意識の変化が芽生えている。「DXはゴールではなく、スタート地点にすぎません。大切なのは、誰か一人が先を走るのではなく、全員が“理解して、使える”状態になること」と寺田氏は語る。その言葉どおり、同社では今年度も延岡ITカレッジに新たな社員を送り出す予定だ。「これからも、会社全体で“学び続ける”姿勢を大切にしたい」——。変化を恐れず、学びを積み重ねる企業文化が、静かに、しかし着実に根付き始めている。

■ 「迷うくらいなら、一緒に受けてみてほしい」

「“何をしたらいいか分からない”という会社こそ、受講してみてほしい。自分たちがそうだったからこそ、そう思う」と藤高氏。「経営者と社員が並んで学ぶことで、会社全体が動き出す。寺田測地設計有限会社はそれを体現した」と講師は語る。“分からない”から始まった延岡ITカレッジでの学びは、今や会社を前へと押し出す大きな原動力となっている。

Episode 1

令和6年度延岡ITカレッジ受講
キャリアアップコース

「“できるかどうか”ではなく、まずは“やってみる”。」

山下　留佳 氏（現在　寺田測地設計有限会社　社員　AI/DX課）

ースキルも自信もなかったわたしが、延岡ITカレッジで学んだ5か月間ー

■ ITは初めて。不安の中でのスタート

「自分にできるのか」———— 週3回以上、5か月にわたる挑戦。しかも、まったく未知のIT分野。「正直、不安でいっぱいでした」 そう語るのは、延岡ITカレッジ受講生・山下氏。だが、実践の中でふと気づく。「“あ、自分でもできるかも”と思えたんです」小さな手応えが、不安を自信に変えていった。

■ 受講中「自分で考え、作れる人」へ

最も印象深かったのは、コース後半の「ハッカソン」。3人1組でツール開発に挑み、山下氏はExcel VBAでのマクロ作成を担当した。「AIにどう伝えれば動くかを考え続け、2週間かけてようやくひらめいたんです。“自分にもできた”という喜びで本当にうれしくなった」と語る。この経験が、「使う人」から「自分で考え、作れる人」への転機となった。

■ 就職 — ハッカソンの出会いが、仕事に

山下氏が現在働く寺田測地設計有限会社との出会いも、このハッカソンのチームだった。プロジェクトを通じて姿勢やスキルが認められ、受講修了後に正式に採用が決まった。「まさか自分が就職できるとは思っていなかった。本当にうれしかったし、何より“自分のスキルを必要といってくれた人”がいることが心強かった」と語る。

■ メッセージ — これからの展望

一歩踏み出すことがすべての始まりだった。「もっとAIを深く学び、他業種のDX事例にも触れたい。これからは“もう一歩踏み出す”気持ちで挑戦していきたい」と語る山下氏。

「不安はあったが、延岡ITカレッジでの5か月は、人生で優先してよかったと思える時間」と振り返る。「“できるかどうか”ではなく、“やってみるか”が大事。それがすべての始まりだった」と、迷う人への力強いメッセージを送る。